



TITLE:

# カーペンターの社會改革意見

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

---

CITATION:

河田, 嗣郎. カーペンターの社會改革意見. 經濟論叢 1919, 9(2): 232-250

ISSUE DATE:

1919-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127560>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第九卷 第二號

大正八年八月一日發行

## 論 說

住居税の本質及其構造……………

法學博士

神戸 正雄

カーヘンターの社會改革意見……………

法學博士

河田 嗣郎

社會政策より觀たる吾國の財政(二)……………

法學博士

小川 郷太郎

人糞尿の國益(二)……………

法學博士

財部 靜治

植民地の勞働政策(二、完)……………

法學博士

山本 美越乃

## 時 事 問 題

支那の富源開放と其社會問題……………

法學博士

戸田 海市

銀行の手形引受制度……………

法學士

大森 研造

## 雜 錄

航空運送……………

法學士

小島 昌太郎

今年度下半年に於ける内地產米の

量、價に就いて……………

法學士

伊丹 萬里

社會問題評論……………

法學博士

神戸 正雄

## カーパーペントアの社會改革意見

河 田 嗣 郎

### (一) 序

前號に於て吾人はペンチー氏の組合社會主義に關する見解を窺つて見た。本號に於ては更にカーパーペントア氏(Edward Carpenter)の現在の經濟に對する批評と其の改造に關する意見を叩いて見ることとする。ペンチー氏の主張がカーパーペントア氏の思想に負ふ所の多大なるはペンチー氏自ら之を言明して居る。<sup>1)</sup>

### (二) 文明の病患と其の救治

カーパーペントア氏の社會改革に關する意見を知らんが爲めには、必ずや先づ氏の現代文明に對する批評を見、如何に氏が現代の社會と經濟とに於ける病患に就いて其の禍根の在る所を指摘せるかを知らなければならぬ。

1) A. J. Penty, The Restoration of the Gild System, London 1906, Preface.

カーペンター氏の見た所に依れば、吾等は現今文明生活を爲しつゝありと稱せらるゝに拘らず實は一種不可思議なる状態の下に在るものにて、確かに一種の病的状態に在りとせらるゝ。而して氏は此の文明の病的状態は諸多の國民の必ずや一度は経過せざる可らざるものなるが如くに考へらるゝけれども、古來史乘の示す所、此の病的状態を都合好く経過して其の完全なる恢復を得たるものは、一として之れある莫しと喝破して居る。<sup>2)</sup>

氏は以爲らく、

試に現今諸國內に於ける醫師の數を見よ。其の如何にも多數なるには、何人と雖も一驚を喫せざるを得ざる可く、斯くも多數の醫師を要する現時の人々は、如何にして其の健全なるを謂ひ得るや。而してそは獨り文明人にのみ限らず。未開人と雖も一と度文明なるものに接觸すれば、直ちに諸多の疾患の爲めに侵さるゝ所となる。又家畜に就きて之を見るも、彼等は野獸の全く之を有せざる多く病を有し、其爲めに苦み其爲めに薨れつゝある。

惟ふに現時の病患は之を肉體的のものと精神的のものとを兩方面に於て見ることが出来る。其の肉體的疾患は身體内部に於ける調和と統一との缺如より來るものたるや言を俟たぬ。然るに精神的に見たる現時の病患もやはり此の調和と統一との缺如より來るものたるに外ならずして、現時に於ける精神的大缺陷は、人心一般に安定を得ず、常に動搖せる不安の状態に在ることであ

2) Ed. Carpenter, Civilization: its cause and cure, 10 th. ed., London 1908, P. 1.

る。

尤も文明といふ詞は時に異なる意味に用ゐられ、一方には人類の到達すべき理想的狀態を意味し、他方には人類の経過し來れる歴史的過程を意味する。而してカーペンター氏は文明の意義を後者の意義に解する者にて、そは諸多の國民の経過し來れる過去の狀態と現に之を有する、狀態との連續せるものと見んと欲する。此の意味に於ては人類の文明はそが所有權を有するに至り私有財産制の認めらるゝに至りたる以前と以後とに於て、明瞭に區別せらる可き相異を有する。所有權の一と度認めらるゝに至りてよりは、社會生活の諸般の關係は一大變化を生ずるに至つた。即ち此の制度の樹立の爲めに、從來社會組織が血統關係を基礎として血族團體(*gens*)として互に對等なる者の集團たりしものが打破せられて、物質的所有の上に築かれたる階級的組織が表はるゝに至つた。又そは昔時の母權制を打破し母系の俗を打破して女子は男子の所有たるに至らしめた。又そは土地の私有よりして之を所有する者とせざる者との階級的區別を生ぜしめ、地代、抵當、利子等の諸件を發生せしめ、又奴隸と農奴サーフと賃傭勞働者とを發生せしめ、或階級が他の階級を支配するの制度を造り、終に國家制と警察制との發達を見るに至らしめた。

されば現今の文明の起原は大凡に之を言ひて所有を基礎とする階級の發生し、社會が諸多の階級に分割さるゝに至りたる時代、階級政治の行はるゝに至りたる時代に在りと謂ふことが出来る。

階級的社會組織の發生以前の社會に在りては、各人は其の集團内に在りては自由にして平等なるを原則とし、其の身體は驚く可く健全にして其の精神は單純なること、多くの未開人に關する記述の示す所の如し。此の未開時代に於ける身神の健全なる狀態は、畢竟之れ身神を貫ける統一と調和との存するに依るのである。然るに所有權を基礎とする新文明の開くるに至りてよりは、此の統一は漸次に失はれ、人をして個人的にも社會的にも漸次に其の生活の健全を失はしむるに至つた。<sup>3)</sup>

右の如き見地よりしてカーペンター氏は更に進むで考ふるには、

人の生産力の増加に依りて財産の増加せし事實は、三様の道に於て人に對して働を及ぼすものである。一には人をして自然より隔離せしめ、二には人をして眞實の自己より分離せしめ、三には人をして其の朋輩より分離せしむる。即ち所有の發達に依り、財産の増加に依りて、人は漸次に其の自然的生活を捨て、人爲的生活に移り、居住衣服食物等に於て總べて自然的なるものを捨て、益々人工的なるものを用ゆるに至る。又人は其の慾望満足に對するあらゆる物質的手段を有するに至れば、諸多の方面に於ける感覺上の享樂を追ひて只管其の満足を求め、身神一體としての生活上の満足を得ることよりも、個々の感覺上の享樂に耽り、自己と生活との分離を來す避け難い。而して又最後には財産の増加するに連れて人は自己一個の世界を造り、自己の利害を以

3) *ibid.*, pp. 2-26

て他人の利害と分離せる、大多數の場合に於ては之と相反せるものたるに至らしめ、人々は共同一致の生活を爲すを止めて、互に自己の城塞に立籠りて個別的なる生活を營み、他人は之を朋輩と見るよりも、之を仇敵と見る場合多きに至るを避け難い。而して之れ實に所有權の發達と財産の増加との爲めに生ぜる生活上の變化たるを思へば、所有權の發達が文明變轉の上に齎せる意義の如何に大なるかを知ることが出来るであらう。而して又此の狀態の表はるゝに至れば、社會一般の秩序維持の爲めに國家的組織と警察制度との發生の必要を見るに至るや言を俟たぬ。

さればモルガン(Morgan, Ancient Society)の如きも、文明的狀態は人格的基礎の上に築かるゝよりも、地理的にして所有權に依りて作られたる基礎の上に立つものとして居る。即ち氏は人類文明の發達上に於ける財産所有の勢力の絶大なるを主張し、アリアン及セミチツクの諸國民を野蠻未開の狀態より上ばして文明に入らしめたるものは、此の財産所有に依りて齎れたる勢力なるを述べて居る。

按ずるに、國家的政治組織の當初の形式は君主政治にして、次は寡頭政治及び金權政治である。然るに今や此等のものは其の活力を失ひて、人々は外界の勢力に對する衷心の信仰を失ひ、然かも其の生活を導く可き眞實の内的勢力を捕捉する能はざるが故に、現今諸事混沌として各人皆其の小利己心に從て働き、一種の無政府狀態を呈しつゝある。人動もすれば之を呼んで民主政治と

爲せども之れ決して眞實の民主政治に非ず。民主政治は今日以後吾等の之を造り出すに努む可き所のものにして、それは各人皆其の眞實なる内的要求に依りて、統一ある條理の下に行動し、社會は自らにして自由にして然かも統一ある狀態に歸し、人と社會とが共に失ひたる統整ユニタリー・インテグリティと完備とを恢復し、政治は決して外界の勢力に依りて支配せられず、社會は多數人に依りて成れども一人の如くに働き、各人の要求即ち社會の要求たり、其の要求は常に個人的にして同時に社會的良心に依りて導かれたるものでなくてはならぬ。

カーペンター氏は右の如くに考へて、所有制の發達が人をして現時の如く不自然にして疾患多き生活に入らしめたるものと爲す。從て氏の考ふる所にては、吾等の進む可き文明の將來は要するに自然に歸り、自然的に考へ、自然的に生活するを以て標的とせなければならぬ。今や人々は餘りに自然を離れたり、餘りに自然を離れたるが故に身體は虛弱となり精神は不健全となつた。之を救ふの道は自然に歸るの外に存せず。自然に歸りて今少しく衣食の道を簡單にし、然かも同時に精神の純一を期するに於ては、吾等の文明は調和あるものとなり、各人は相互に相助けて、全體は各自の爲めに、各自は全體の爲めに生存するに至り、安慰と幸福とは茲に享受せらるゝであらう。斯くて吾等の社會は共產的狀態の下に自らなる大調和を齎すを得可く、外界より來る權威と統制とは廢れて、各人自發の内的要求は輒ち茲に大いなる統制として自然的なる働を爲し得る



に至る可きである。

### （三） 商業主義の失敗と其害毒

右は文明一般に對する批評であつて、文明史的考察を基とするものである。然るにカーペンター氏は更に經濟史的考察に基ひて現時の經濟に對する批評を試みて、其の病根の在る所を明かにせむと期した。

氏は謂うやう

前世紀の中葉に當りて世は正しく通商貿易に依りて救済せらる可しと爲すの見解が行はれた。即ち彼の自由競争の大原則に依り、各人をして各自の利益の爲めに其の好むが儘に爲さしめよ。斯くて通商交易の働に依りて世各國をして又其の利益とする所に向つて爲すが儘に爲さしめよ。斯くて通商交易の働に依りて世は遠からざる内に一の大なる四海同胞の一大團結と化す可しとせられたのである。當時の論者は以爲らく、シエフィールドの鍛工の鎌ひたる鎌は露西亞の百姓に依りて用ゐられ、之を以て刈取られたる小麥の一部は馳て英國人の胃の腑を満すこととなる可し。又ランカシャイアの紡績工女が工場に於て印度人の爲めに輸出向の糸を紡ぎ、一日の業果てゝ宅に歸り來れば、彼女は其勞を醫せんが爲めに一服の茶を啜る可く、然かも其茶は印度に於ける有色の其姉妹に依りて摘み

取られたるものなる可し。總べて斯くの如くにして世は有無相通する一の大いなる共同團體として利益と繁榮と幸福と圓滿と平和と安慰とに充ち、世界を擧げて一家の如くに其生を樂しむに至る可しと。

是は洵に美しき夢であつた。併し乍ら其夢は如何に美しくとも、唯だ一場の甘夢たるに外ならぬ。今や世の様を見れば、通商と貿易とは行はれて居る。頗る盛に行はれて居るけれども、自由と友愛とは何所に在るか。在るは唯だ勞賃奴隸制である。各國民は爪を磨き牙を鳴らして阿修羅の鬭争を事として居る。

此の甘夢がたゞ甘夢たるに止まり、終に實現されなかつたのには、抑も理由がある。然かも其の理由は簡單である。其の所謂通商貿易なるものは利己と貪慾とを基礎とするものであつた。世界的共同と友愛とを齎す可き精神的基礎を初より有つて居なかつた。之が理由である。樹は其の種子以外の果實を結ぶことは出来ぬ。友愛の精神なく、共同の精神の缺けたる所に、如何にして世界同胞主義の共同生活が成立ち得やうぞ。<sup>5)</sup>

仍て少しく現時に於ける通商貿易主義の失敗の跡を尋ねるに、其の著明なるものが三つある。

第一は自由放任の政策 *laissez-faire* が、實際に於ては各人の圓滿無碍なる交通と各國民の自由なる交易との下に、共同的なる平安の世界を造り出すことなくして、却て強食弱肉の狀態を醸成

5) Ed. Carpenter, *Towards Industrial Freedom*, 2 nd. ed., London 1918, pp. 18-20

し、各個人の間には激烈なる營利上の鬭争行はれて、適者殘存の理法は容赦なく其の暴威を振ひ、各國民間には又大いなる貿易上の競争行はれて、利己的なる政策の下に幾多の不自然なる結果を齎することゝなつた。斯くて今や自由放任の政策に對しては大いなる反動の氣勢起り來り、經濟競争場裡に於ける弱者は之を國家が保護するにあらずんば、唯だ見殺にするを避く可らざるに至り、諸國間の經濟競争は又却つて諸國をして自由交易を妨ぐる幾多の政策を講じて以て自ら衛るの必要切實なるものあるに至らしめた。之は實に自由競争と自由交易主義が其の結論として齎せる所で、當初の豫期とは全然反觀せるものである。

第二に擧ぐ可きは生産上並びに交易上に於ける詐偽的行動の發生と増加と之である。之は現時の商業競争の下に於ては洵に著明なる所のもので、競争の激烈は不正手段に依りて競争者を薙さんとするに至り、あらゆる詐術を用ゐて商品の賣廣めを爲すの必要を生み、廣告を利用して一般消費者を瞞着するに至つた。現今大生産者や大商人が廣告の爲めに費す所は莫大なる額に上ぼつて居るが、之は現時の商業主義に伴ふもので、昔時には其の必要がなかつた。昔時に在りては市場が地方的なりし爲めに生産と消費と需要と供給とは地方的に密接の關係を有し、其の適合は圓滑に行はれた。然かも生産は用の爲めの生産で、供給は需要に應じて行はれたのであるから、兩者の不適合を見る場合は少く、廣告の必要などは多く存在する餘地がなかつたのである。然るに現

時に在りては生産は營利の爲めに行はれ、供給は需要に先立ちて表はるゝの狀態を造り出せしが爲めに、廣告に依りて需要を喚起するの必要起り、其の廣告に費さるゝ所のものは、結局商品の代價に加算されて、社會一般が無益に之を負擔するの愚を演ずることゝなつた。

第三に舉ぐ可きは現時に於ける交易狀態の不安定と從て生ずる經濟一般の不安定といふことである。是は生産と消費との連絡密ならず、需給の適合の確實ならざるより來る當然の狀態である。而して現時の如く智識が生産上に利用せらるゝ時代に在りては、生産技術上に於ける新たな發明は一朝にして或種の商品又は或地方の産業に對して大革命を生ぜしめ、之に因る生産上の浮沈興廢は頻々として隨所に發生しつゝある。之が爲めに企業は不安極まるものとなり、經濟一般の狀況を不安定ならしむるの大なるや實に夥しきものと謂はねばならぬ。其他一般的に現時の商業なるものは常に闇中摸索の狀況に在るものなれば、其の動搖の大にして不安の甚しきこと、前代未だ曾て有ざる所である。然るに商業は懸て之れ生産と消費とを連結するものなれば、爲めに經濟界全體の不安定を齎すことの大なるは洵に避け難き所とせなければならぬ。

總て右等の弊害は現時の商業主義が營利を基礎とし、利己と貪慾を標準と爲し、社會全般の福利を眼中に置くことなく、利の爲めに働きて用の爲めに働かざるより來る次第である。精神的に共同一致の要素の缺けたることが即ち病の根源たらざるを得ない。英國の如きに在りて商業主義

は前世紀の中葉以來大いなる物質的繁榮を齎し、國富の増加と通商貿易の隆盛とを招來したりと雖も、然かも一面に於ては社會の不安と不幸とをして前代未聞のものたらしめた。此の狀態を革新して美と幸福とに満てる新社會を造らむが爲めには、新精神の樹立と産業上に於ける新主義の確立との外には據る可き何物もない。樹木は其の種子と異れる果實を結ぶことは出來ぬのである。現時の精神を以てしては、友愛や人道や美や善やを其中より絞り出す可き素地はない。唯之れ利己と惡徳と粗野と悲慘とが物質的繁榮と相競ふて増長し行くのみである。<sup>6)</sup>

#### (四) 勞働の藝術化と自由なる社會生活

以上論ずるが如くにしてカーペンター氏は、現時の文明と現時の經濟との弊害多きを指摘し又其の狀態の行詰れるを思ふと同時に、之を改革して新たな善美の社會と經濟組織を造り出すの必要の迫れるを信じ、其の改造の大事業を行ふに就いて大いなる確信を示して居るのである。而して氏の社會改造の大眼目は社會組織の改革と同時に必ずや時代精神の改造を行はざる可らずと爲すに存し、之に依りて社會の人々が營利熱を去り競争心を捨て、善と美とに向つて生存の意義を樹て、和衷共同の精神を以て社會全般の圓滿にして安慰なる生活を造り出すに努力せざる限り、如何に物質的なる繁榮を見又形而下の改善改革を行ふとも吾等の社會は到底善美にして圓滿

6) *ibid.*, pp. 21-41

なるを得ず又各人の生活も安んず快適なるを得る見込はないと主張するのである。而して氏は此の精神の根本的涵養よりして各人が其の生活を美化し勞働を美化し、勞働は各自の之を好み且つ樂む所なるが故に之を爲すものたるの狀態を造り出さざる可らずとする。斯かる狀態の下に於て各人が各々其生に安んじ其業を樂みて適意の活動を爲すに於ては、吾等の社會は自らにして整備し、自然的にして自由なる然かも、友愛に満ち同情に富みたる、温かき共同生活體となるを信ずるのである。即ち氏の社會改造の標的は第一には吾等の生活をして今少しく善美なる生き甲斐あるものたらしむること、第二には勞働自體が一の喜悅たり快樂なるに至らしむること、に存する。

氏は以爲らく、

ラッセル(Bertrand Russell)の謂ふには、人の慾念は大體に於て之を二大別することが出来る。

一は所有(Possessive)の慾念で他は創造(Creative)の慾念である。前者は人をして利己的ならしめ互に鬭爭軋轢せしむるに反して、後者は人をして共同的ならしめ、相互共助の精神に依りて團體的調和を得せしむるものなりと。今人心と社會生活とを改造して、人生を今少しく善美ならしめ、勞働をして愉快なる活動たらしむるを妨ぐる大いなる事由は、現今人々の行動が所有の慾念に依りて導かるゝ所多くして、然かも其の慾念が富裕なる階級の人々に最も強く、啻に財物に對する所有を得んと希求するのみならず、同時に力を獲得して、人を支配せむとするの慾念強きこ

とに存せざるを得ない。而してそは又現實に財物を所有するといふよりも、唯だ理由もなく之を所有せんとするの希求 (mania of owning things) たる場合多く、然かも之が爲めに多數人は其の生活をして、日に悲慘に日に殺風景ならしめつゝある。

右の事由あるが爲めに昔時及び未開時代に在りては、却つて人生は生甲斐あるものたり労働は愉快なるものたりし實蹟あるに拘らず、現時の商工業時代 (commercial industrial régime) に在りては生存は頗る單調にして不味のものとなり、多數人に取りては生存の愉快とか労働の快樂とかいふが如きは、寧ろ滑稽に聞ゆる有様とはなつて來た。

然れども今や漸くにして此の状態はクライマックスに到達し、變化の必要は愈々切り來り又變化の兆候は歴然として表はるゝに至つた。

然らば生存をして意義あるものたらしめ、労働をして愉快なるものたらしむるの道は何れに在るや。そは頗る簡單である。労働はそが自由にして創造的クリエイティブのものたる限りは愉快なるものなりて事實を知れば即ち足りる。されば要は唯だ労働をして自由ならしめ、且つ之を創造的の性質のものたらしむるに在る。而して生存は實に労働に依りて其の意義の大部分を爲すものにて、人は目醒めたる間は必ずや何等かの労働を爲し以て生を送るものなれば、労働をして愉快なるものたらしむる限り、生存は從て愉快なるものとなる。同時に又労働が創造的のものたる限り、そは人々

をして之に依りて自己を發揮せしめ、自我實現を爲さしむる所以なれば、其の生存が之に依りて意義あるものとなるや言を俟たぬ。

勞働の自由といふは人々をして其の天性の好む所に從て働かしむるを云ふに外ならぬ。現時の如く之を好まざる場合に於ても生活の必要上長時間或勞働に束縛せられ、之を脱すれば生活を爲し得ざるが如き状態は、不自由なる勞働である。而して人々が自由に自己の好む勞働を爲すに於ては其の仕事は眞實の意味に於ける藝術である。藝術は決して繪畫や彫刻の類に限られたるものではない。苟も創造的なる勞作の行はるゝ限り、それは凡べて藝術である。されば人々は生甲斐ある生存と、愉快なる勞働を爲さんが爲めには、各自皆此の廣き意味に於ける藝術家として、自我の實現と自己解放との爲めに、仕事に従事せなければならぬ。而して各人が自由に自己の好む所を以て勞働に従事する限り、社會生活は自らに調和あるものとなり、愉快にして善美なるものたらざるを得ない。要はたゞ勞働が自由にして創造的なるの點に存する。

勞働が自由にして且つ愉快なるものたるに於ては、勞働の連續を以て成れる生存が愉快にして恵に満てるものたる可きのみならず、勞働によりて製作されたる物は皆美しく整へるものたらざるを得ぬ。蓋し創造力の表現が自由に行はれたる作品は即ち之れ人生其者の具體化であつて、人生が快適圓滿なるものたる限り其の作品は必ずや整美ならざるを得ない。美といふは必竟無理



のない調和の取れたるものを意味するに外ならぬからである。

斯の如くにしてカーペンター氏は各自が自由に其好む所に從て業を爲すに至れば、社會は生産者の諸種の團體の自治に依りて、自らにして調和ある状態を造り出すに至り、自由なる社會生活の行はるゝに至る可きを信ずる。

氏は國家が國內の産業を自ら取行ふが如きは其の官僚式と形式主義との爲めに人をして堪えざらしむるに至る可しと信ずる。現今に於ても既に國家は其の御役所風と形式主義との爲めに少からず社會を困却せしめつゝある次第なれば、之をして更に甚しからしむ可き組織は、到底堪え得べからざるものと考ふるのである。

元來人は法律に依りて支配せらるゝよりも習慣に依りて支配せらるゝを好む者で、法律はなくとも社會は成立し得る。法律と習慣とは決して同一ならず。古き社會や未開の社會は成文の法律は、之を缺けども習慣のあるに依りて能く存續するを得、然かも好く調和ある軋轢なき圓滿なる共同生活を爲し得た。其の實例は之を現存する諸多の未開人の間にも見るを得可きと同時に、歐洲の如き進める國々に在りても尙ほ愛蘭や瑞典や瑞西などの農民の如きは、多くは之れ慣習に依りて生きて居るものたるに過ぎぬ。されば法律なく政府なき自由にして自然的なる社會生活は、現時の如き法律的に束縛されたる、特に所有權の桎梏に依りて固められた社會生活の弊害を去りて

新社會組織として人類の幸福を増し得るものとせなければならぬ。

然るに或論者は斯かる束縛なき社會生活の下に於ては、人々は勞苦を避けて安逸を貪り、怠惰に日を送りて勤勉は世に跡を絶つに至る可しと恐るゝ。之は併し乍ら杞憂である。人は怠惰にして幸福なり得るものではない。活動は生物の生命である。現今束縛的な自己の好まざる勞働に従事し、從て勞働を苦痛とする者の考よりすれば、一と度其の束縛の釋かるゝに於ては人は怠惰に日を送りて敢て勞働を爲さんとは企てざる可しと考ふるであらうけれども、それは強制的なる不自由の勞働に慣れたる者の見解たるに過ぎぬ。自由にして何等の束縛なく強制なく、各自が自由によりて自己の好む所の勞働を選び得る状態の下に在りては、人は必ずや何等かの勞働を選むで之に従事するであらう。働くは愉快なれども、怠惰に日を送るは其の無聊に堪えず實に苦痛多きものたるを悟る可きや明かである。之れ人の天性で、漫然爲すなくして日を送るほど苦痛なるものはない。勤勉に働きて遇々休息するが故に休息は愉快なれども、四六時中休息ばかりして居ては、それは實に堪え難き苦痛たること疑ふ可からざる事實である。

束縛なく強制なき自由なる勞働に在りては、勞働は現今の如く現今の大多數の場合に於けるが如く苦痛たらずして、大いなる喜たり、愉快なる任務たり、實に生存其者たる可きを知らなければならぬ。即ち勞働は現時に於けるが如く手段行爲たらずして、それ自身が目的たり、從てそは

一の娛樂として行はるゝを得て、眞實の意味に於ける藝術たるに至る可きこと記述の通りである。斯かる自由なる社會生活の下に在りては、生産は元より用の爲めに行はれて現時の如く營利の爲めに行はるゝことなく、美と用とを目的として生産は行はれ、自由なる生産と自由なる交易との下に、團體全般の利益と幸福との爲めにする自給的經濟の行はるゝに至る可きを疑ふことが出来ぬ。而して團體の自給經濟の爲めに用を目的として生産が行はるゝに至れば、現時の如く唯だ利の爲めに生産及び交易上に無駄を行ふ必要なきに至るが故に、各自の勞働は其の時間短くして然かもよく團體全般の必要を充すに足るだけの生産上の結果を擧げ得る筈である。各自は自己の趣味嗜好に従て其業を行ふものなれば其の生産能率は強制的に好まざる勞働を爲すを原則とする現時よりも遙かに増大す可きや勿論で、其爲にも亦各自の勞働時間は少くして然かも好く團體の用を充すに足るだけの生産が行はれ得る筈である。

現時の人々の考を以てすれば、人は報酬を得ることなくしては勞働を爲すものに非ずと考へらるゝであらう。けれども團體が纏りたる一體として生存し其間に完全なる共同一致の作業の行はるゝに至れば、各自は團體の全體としての生存の爲めに働き、其の必要に應じて働き、決して現時の意味に於ける報酬を得ることを以て勞働の必要條件とはせぬであらう。現時は用の爲めの生産にあらずして利の爲めの生産たり、たゞ賣らんが爲めの生産たるが故に直接に貨幣上の報酬を要

求せらるゝけれども、團體的經濟の完全なる共同生活の下に在りては斯かる直接なる個別的報酬は必要とせられない。其狀恰も人の身體に於て手の働き、足の働き、其働くや、身體全體の必要の爲めにして何等報酬の問題の起り來る餘地なきと同様である。

斯かる自然的なる團體經濟は必ずや將來吾等の有つ可き經濟組織として、唯一の可能にして又合理的なるものである。然かもそは魔術師の杖の一振りに依りて忽然として表はれ來るが如きものではない。着々準備の整へられて徐々に實現さる可きものである。而して其の完全なる實現を見る迄には、現時の狀態と此の將來の狀態とを繋ぐ可き中間の過渡的狀態が暫くは存在す可きこと理の當然である。見よ、現今既に其の準備は色々に行はれつゝあるを。農業方面に於ても商工業方面に於ても種々の組合團體は組織せられ、著しき發達を遂げつゝある。而して其等の自發的なる多數の組合は又互に連絡を取りて國家的に結合しつゝある。此等の準備が漸次完成成熟するに連れて、總て將來に於ては、完全に自由なる圓滿にして整美なる團體的經濟が造り上げられ、之に依りて現時の個人主義的なる商業組織に固有なる種々の弊害は除去せられ、茲に甫めて吾等の社會は、曾て昔時に之を有したるが如き、安んずる餘裕あるものとなるを得可き次第である。<sup>8)</sup>

凡べて右の如きはカーペンター氏の社會改革に關する意見の大様である。説く所は文明一般に對する批評より始まりて勞働と社會生活との美化に及び、利の爲めの生産を捨て、用の爲めの生

8) *ibid.*, pp. 70-93.

産を行ひ、以て社會生活をして自由に愉快に然かも用足り事備はりたるものたらしめんとするに在する。其の見解は多少ユートピア的分子を交へて居ないではないが、日常生活の美化と勞働及び産業の藝術化との必要を力説し之に依りて以て甞めて社會の改造の大事業は慇懃圓滿快適なる將來の新組織を迎ふを得可しと爲し、それが爲めに何は扱て措き現時の唯物的享樂觀を亡ぼし人心の改造を行ふの必要なるを説く所は、寔に好く時弊に的中し、又よく社會改造の大眼目を捕へ得たるものと謂はねばならぬ。メンチー氏等が此の見解を繼承して勞働の美化を説き美術と手職との一致を希望し、終に中世手工業組織の復興に依りて、將來に於ける經濟組織を建設せんと企て、現時の極端なる自由競争制と商業的營利主義を亡ぼして、將來には團體的共同生活と非營利的にして藝術的なる生産組織とを樹立せんと欲し、組合社會主義（ギルド・ソシアリズム）の旗を掲ぐるに至れるは、理論當然の開展と謂はねばならぬ。吾人はカーペンター氏が現時の一般的なる唯物的傾向と極端なる營利主義とを排し、利の爲めの生産を止めて用の爲めの生産を主張し、勞働を自由にして之を愉快なる目的行爲たらしめ、現時何となく人の人としての生存と勞働とが分離せるを救はんが爲めに、勞働をして自由にして創造的のものたらしめ、之を以て人生の意義を形造る重要要素たらしめんとし、人生を以て愉快なる勞働の連續と爲さんとする思想の根柢に對して、大いなる共鳴を感ぜざるを得ない。勞働と日常生活との美化。是は洵に現代の捕はれたる社會生活の解放の要諦である。